

エッセー

時代にこたえるビビッドな総合系科目を

全学共通カリキュラム運営センター全カリサポーター／朝鮮語教育研究室員
異文化コミュニケーション学部准教授 石坂 浩一

私は 2004 年度に全カリ運営センターの外国語担当教育教員として着任し、17 年間専任として勤務した。それ以前に 14 年間の非常勤勤務と合わせ、教員歴として 30 年以上を立教大学で過ごしたことになる。外国語教育を担当しつつ総合系科目についてもかなり関わったことが、私の特性といえるだろう。そこで、本稿では日本に存在する高等教育機関として備えるべき総合系科目について、感じることを述べてみたい。

学生たちに必要な大学における教育がどのようなものかは、いろいろな意見があろう。だが、例えば「日本と平和条約を結んでいない国はどこか」「日本と国交がない国はどこか」と聞かれた時に、立教大学の学生はすぐに答えられるだろうか。そして、なぜそうなっているかを説明できるだろうか。あるいは、それは知らなくてもいいことなのか。

私は非常勤の頃から朝鮮語のほかに総合系科目を担当していたが、特にかかわりが深くなったのは平和・コミュニティ研究機構（平コミ）のメンバーとして総合系科目に関わるようになってからである。平コミは学内のいろいろな研究所とは位置付けのちがいがあり、全カリや大学院に対して科目提供を行うという役割を持っている。平コミの事実上の創設者である名誉教授の五十嵐暁郎先生が、大学と協議して、そういう独特な機構にしようということ話をまとめたと聞いている。特に総合系科目に全カリサポーターとして関わるようになってからは、立教大学でどのような総合系科目が必要か、現在のラインアップをにらみつつ考える機会を与えられた。

全学共通カリキュラム（現在は全学共通科目）の総合系科目は立教のリベラルアーツの基盤となるべきものだが、いろいろな課題があったと思う。まず自分の専攻に関わることだが、朝鮮半島の歴史や日本との関係について基本的な事柄を学ぶ科目が確立していなかった。侵略や植民地支配に関する歴史を知らなくては、日本と朝鮮半島との間の問題の意味や根深さを知ることはできないし、日本社会に広がり問題化しているヘイトスピーチに対する自分なりの姿勢を持つこともできない。いまだに国交のない朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）との課題も、いつまでも棚上げにするわけにはいかないだろう。それにもかかわらず 2000 年代以降、高等学校までの教育で朝鮮半島とのかかわりについては次第に教育されなくなってきているように見える。大学で教えなければ、研究に基づく知見を得る機会を学生たちは失ってしまうことになる。

また、往々にして見落とされているのはロシアである。隣国であり、外交レベルでは領土問題も存在している。そして、いまだに日本との平和条約が締結されていない。世界的冷戦が終息して以降、エリツィンやプーチンといった個性的政治指導者を生み出し

てきたロシアに対して、一時的に注目されることはあっても、日本社会の全般的関心は低い。しかし、中国とともに東北アジアに大きな存在感を持ち、日本の政治外交上も深く考慮すべきロシアを、多くの市民がよく知らないままでいいのだろうか。

外国語教育との関連では「中国語圏の社会／文化／文学」が開講されているが、学生たちが親しみやすいものをとということで、文化や人についての内容が中心になっているようだ。21世紀に至って米国と並ぶ世界の大国の地位を占める中国について、政治・経済レベルでの知識や冷静な情報が学生たちにはもっと必要ではないだろうか。

裏を返せば、中華民国(台湾)についての知識もところも少ない。簡単に往来できるし、台湾からの留学生たちも少なくないので日本人は深く考えずに過ごしてしまうが、日本は中華民国との正式な国交はない。台湾は親日だというイメージばかりが先行し、植民地支配や戦後台湾が経験してきた歴史の意味について、深く考える機会も多くない。近隣国についてだけではない。中東やアフリカについて、日本の一般的雰囲気は「遠い」という一言に尽きるだろう。しかし日本はこうした地域についても深く関わっている。とりわけ、脱植民地化という意味では、日本が歴史的に直面する課題について示唆するものがある。また、米国中心の世界秩序がこれからどのように変わっていくかを考え、学生たちの世代が将来の世界を考えるうえで、目先のことにとらわれない知識が大切だろうと思う。

その反面、学生たちの世界に対する基礎知識は少ない。ものの考え方は一つではないだろうが、基礎知識がないために、正確でない知識に惑わされやすいという問題点が生じるのではないだろうか。「知ることは力だ」という言葉は、近年あまり耳にすることがないが、やはりそれこそが立教のリベラルアーツの精神ではないかと思う。

2016年度から平コミでは、全学共通科目総合系科目の「学びの精神」科目群で「アジア地域での平和構築」と「グローバル社会での平和構築」という科目を4つずつ提供している。この他、「多彩な学び」科目群で4科目を提供し、合計12科目を展開している。特に「アジア地域での平和構築」では2020年度以降、詩人ユン・ドンジュ(尹東柱)にちなんだ科目として、日本と朝鮮半島の近現代史を知るための授業を池袋で春・秋学期、新座で春学期に開講し、詩人の歩みと歴史を並行して伝え、学生たちに考える機会を提供している。

ユン・ドンジュはよく知られているように植民地下の朝鮮で生き、日本の立教大学、同志社大学で学んだが、日本の特高に捕らわれ敗戦直前に27歳で獄死した。いわば、日本の植民地支配による犠牲者だが、彼の詩は日本に紹介され、広く共感を呼んだ。1980年代に訳詩集が出版されて以降、いろいろな日本人、在日コリアンが彼に心を寄せ、集いあった。韓国でもユン・ドンジュは亡くなってから詩集が出版され、初めて広く知られた人だ。彼はまた亡くなってから、作品を通じて日本と韓国を結び付けた。その魅力は今日まで続いている。

立教大学では卒業生有志とチャペルが中心となり毎年追悼行事を行ってきた。だが、命日の2月16日に近い日を選んで行事を行うため、教員は入試業務に追われ、学生は

大学にあまり登校しない時期ということで、学内的な共有が進んでこなかったように思える。立教での追悼行事は朝日新聞の社説で取り上げられたこともあり、学外では毎年心待ちにしている方々がいる。それにもかかわらず、在学生や教職員がユン・ドンジュの存在を知らないのでは残念なことだ。そこで、立教大学に入学したからにはユン・ドンジュのことを記憶して卒業してもらいたいということで、平コミでユン・ドンジュ科目と呼ぶ授業を設定したのである。単に歴史を伝えるだけではなく、ユン・ドンジュという人が生を享けたのがどのような時期だったのか、このような詩を書いた時期に何があったのか、それを思いつつ歴史の意味をかみしめてほしいという趣旨のこの科目。韓国との交流を希望し、言葉を学ぶ立教の学生たちに、ぜひとも接してほしいと思う。

少し話がずれるが、韓国や中国からの留学生が多くなっている今日、留学生たちに日本の研究や教育の水準を正しく伝えるためにも、東北アジアに関する総合系科目は重要だと考える。異文化コミュニケーション学部のオムニバス授業で担当は半期に1回だけだったが、ここ数年日本軍「慰安婦」問題を取り上げてきた。その授業を履修している留学生たちが書いたリアクションペーパーを見ると、日本では歴史の問題について嫌なことばかり耳にしてきたので、今回の授業を聞いて驚いたとか、日本でこうした考え方があることを初めて知ったという反応を何度か目にした。少なくとも、日本の研究が政府やマスコミの見方とは違うことを伝えることにも価値があるだろう。

このほか、「グローバル社会での平和構築」では「国際政治の中の沖縄」や「アフリカの国際関係と平和構築」などを展開し、「多彩な学び」科目群ではロシアとパレスチナに関する科目を置いている。総合系科目について、平コミ提供科目の貢献はそれなりのものであるのではないかと思う。今後の立教の教育で大切に思われるのが、こうした科目と外国語教育を有機的に結び付けていくことである。

おそらく、外国語教育にたずさわっていない教員は、学生が学部で英語以外の外国語を勉強しても大したことはないと思っているのではないだろうか。だが、決してそうではない。大学入学前に、例えば韓国の歌やドラマに関心を持つことで、検定の級などを取得していなくても、かなりの能力を備えた入学者が増えてきている。関心を持つ若者の能力の伸びは侮れない。在学中に韓国の大学に交換留学して授業を受ける学生は増えつつある。外国語科目と総合系科目を合わせ、こうした学生たちの能力をいかに引き出せるかが、私たち教員に問われているのである。

コロナ禍で大学教育は当面、試行錯誤を繰り返すだろう、その過程で、時代状況にふさわしく、何が重要かを考える機会を与えるビビッドな教育を総合系科目が支え、外国語教育がそのための力を与えてくれるのだと思う。そうした有機的な連携が今後一層発展することを願ってやまない。

いしざか こういち